

評価調査結果要約表

I. 案件の概要

- 国名：タイ王国
- 案件名：淡水養殖研修コース
- 分野：淡水養殖
- 援助形態：第三国集団研修
- 担当部局：JICAタイ事務所
- 協力金額：18,293,629タイバーツ
- 研修員一人当たりコスト：281,440タイバーツ
- 日本の貢献割合：78.8%
- 協力期間 (R/D)：2000年1月6日
開始：2000年度
終了：2004年度
- 先方関係機関：外務省技術・経済協力局
農業・組合省水産局
- 研修実施機関：内水養殖研究所 (IARI)
(前国立内水養殖研究所 (NIFI))

1. プロジェクトの背景

養殖技術の研修コースは、日本とタイ王国の協力のもと2000年に開始され、日本側の協力はJICAを通じて行われた。コースにはアジア太平洋地域の16の国々から研修生が参加した。内水養殖研究所 (IARA) (前国立内水養殖研究所 (NIFI)) は、これまで淡水魚養殖においては所属研究員や海外からの客員研究員による研究の蓄積と恵まれた実験施設を有していることから、研修実施機関として本コースの研修プログラムの企画も手がけた。

2. プロジェクトの概要

本研修コースは、養殖の普及・研究などに携わる研修生に淡水養殖の知識と実践的な技術を提供することを目的としている。コースは約60日間及び英語で履修された。研修生は2000年度から2003年度の4年間で65名に及んだ。

(1) 研修プログラムのアウトプット

- 1) アウトプット1：研修生は淡水養殖に関する科学的な基礎知識を習得する。
- 2) アウトプット2：研修生は淡水養殖の実務に関する知識と技術を習得する。
- 3) アウトプット3：研修生は淡水養殖の普及活動と活動体制に関する知識を習得する。
- 4) アウトプット4：研修生は養殖業の改善指導とその方法を習得する。
- 5) アウトプット5：研修生は自国における特定の養殖開発についてグループ討議をおこなう。
- 6) アウトプット6：研修生は淡水養殖に関するプロジェクト実施とその方法を習得する。

(2) 投入

日本側：14,408,352タイバーツ (78.76%)

相手国側：3,885,277タイバーツ (22.24%)

II. 評価調査団の概要

評価調査団

斉藤淳、プラシット・パタナキリパイブン、チャソパ・クリンブン、岡本純子、小笠原未歩子

調査期間：2004年1月21日～2004年3月31日（2003年度）

評価種類：終了時評価

III. 評価の結果

1. 研修プログラムの達成度

研修プログラムの達成度はコース終了後にIRAIによって実施される終了試験およびアンケート調査から計る事ができる。その試験結果によると研修生は研修において十分な知識を習得している。一方、研修内容に対する研修生の評価も満足度が高く、本コースは当初の目標を十分達成していると言うことができる。

2. 評価結果

(1) アウトプットの達成度の分析

アウトプットの達成度に関する総合的な評価は、インタビュー調査やアンケート調査の結果からすれば、淡水養殖コースは当初のアウトプットはほぼ達成できたと評価できる。研修生は業務に必要な知識を習得し、中にはより高い地位に昇進し、研修で得たノウハウをプロジェクトの形成や政策立案に役立てている者も見られる。また、研修で習得した知識は、研修生一人ではなくその他の職員や養魚家にも伝えられ、職場や地域で共有することができている例もある。

(2) 妥当性の分析

淡水養殖の第三国研修は、参加国の淡水養殖に振興の必要性や施策に対応したものである。これらの国々では、国民の栄養改善、特にたんぱく質の摂取の増加が大きな課題となっており、淡水養殖技術やシステムの向上による淡水魚の増産は重要である。このような観点から、研修コースでは、科学的な基礎知識、実務に必要な知識、普及活動、養殖場の経営、他国の養殖事例、プロジェクト実施などを研修生のレベルやニーズに適するよう配所しながら習得させている。

3. 研修プログラムを促進する要因

本トレーニングコースの成功の秘訣は以下の6点に集約できる。

- よく準備されたカリキュラム、コース企画
- 知識の十分な講師陣
- 実施機関（IRAI）の研修専従スタッフ
- DTECやIRAIからの受講資格審査による研修生の的確な選定
- JICA、DTEC、IRAIや研修生など関係者の協力
- コース期間中の研修生の研修に対する前向きな姿勢

4. 研修プログラムの阻害要因

研修プログラムの阻害要因として以下の点が指摘できる。

- 言語、文化の差に派生する問題
- コンピューター、実験設備などの機材の不十分さ
- 実務研修期間におけるホテルと実験室の移動の不便さ
- 理論的な話題に対する研修生の理解度の違い
- 研修期間中のカリキュラムが多すぎることによる負荷の大きさ

5. 結論

インタビューやアンケート調査では研修期間中の多忙すぎるといった意見もみられたものの、すべての回答者及び研修アドバイザー及び実施機関は淡水養殖の研修は大変有意義であり、研

修参加国の養殖業の発展に寄与できることを確信している。本研修の成功は、関係者の協力の賜物であり、また、このような協力関係は将来的に研修生間、研修生と実施機関間の強固な連携へと成長する土台となりうる。この研修プログラムは、研修生への負荷の軽減など若干の見直しを行った上で、今後とも継続されることが望ましいと考えられる。

6. 提言

この研修の需要は未だに高くまたIARAの実施成果も評価されている。したがって、この研修は今後とも継続されるべきと考えられる。

タイ王国に対する提言

- 研修参加国の現況やニーズの調査の実施
- 研修目的やカリキュラム内容の見直し
- 研修生に対する受入基準や研修希望者の手続きの見直し
- 研修後の研修生に対する評価及びモニタリングの実施

JICAに対する提言

- 研修事前調査団派遣に対する支援
- 研修に必要な機材及び施設に対する援助
- 研修履修者へのモニタリング実施の仕組みづくり
- 研修参加国の拡大

7. 教訓

本研修を通じて、以下の事柄の重要性を教訓として学ぶことができた。

- 研修実施機関の協力体制とスタッフの人材育成
- タイ王国政府およびJICAによる技術供与及び経済的援助の必要性
- 社会・文化の差による問題
- プロジェクトの計画、構成及び実施の必要性
- 研修生についてのプロフィールの登録・記録の必要性
- 研修実施機関のアウトプットに沿った評価の実施
- プログラム全体における活動時間のバランスの適性